
魔法先生ネギま！？ 剣聖の騎士

剣聖の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！？ 剣聖の騎士

【Nコード】

N4714W

【作者名】

剣聖の騎士

【あらすじ】

子供を助けその代りに死んだ白金剣斗しろがねけんは女神アテネと出会う。そしてアテネから異世界《ネギま！？》の世界に行く事になった剣斗。そして彼の前に剣豪伊藤一刀斎が現れ剣斗と一緒に行くこととなり。二人の冒険が今始まる

女神と剣豪と騎士

『女神と剣豪と騎士』

「・・・ここは」

目が覚めるとそこは何も無い白い空間が広がっていた。

「俺は確か、子供助けて」そして、死にました」あなたは？」

俺の前に白い服を着た女性が立っていた。

「わたしの名は、アテネ。あなたたちから女神と呼ばれているものです」

「確か、都市の守護神や知恵・工芸・学芸の神と呼ばれる女神ですな」

「そうです。それと、あなたが助けた子共は大丈夫ですよ。ケガ一つありません」

「それは、よかった。それで、俺は天国と地獄どっちにいくのですか？」

俺は目を閉じて女神アテネの返事を待った。しかし、返ってきた言葉は俺の予想とは違う言葉だった。

「あなたは天国にも地獄にもいきません。あなたには異世界へ行ってもらいます」

「え??」

異世界??魔法の世界とかそんなものか??

「そうです」

心読まれた!?

「ホントは少し違うんですけどね。簡単に言うとマンガとかですかね」

無視された!?

「女神ですから。まずは、『ネギま！？』の世界にでも行つてもらいます」

「ネギま！？です・・・ん。まずは？？」

「あなたには『ネギま！？』以外にもさまざまな異世界に行つてもらいます。簡単に言つと異世界の旅人ですね」

「はあ・・・」

「気に入りませんか？」

「いえ、そうじゃなくて・・・剣術しか取り柄の無い俺にどうして？」

「他の神なら、うっかりやミスでとかで転生しますがあなたは違います。わたしの勘があなたを選びました」

「俺は勘で選ばれたのか！？」

「わたしの勘は良く当たりますよ。恋姫で例えるなら孫策なみに」

「例えるな！！そして、なぜ孫策！！」

「知らないのですか？恋姫の孫策伯符を」

「・・・もういいです」

「素直な人は好きですよ、わたし」

「そりやどうも。それで、一つ聞きますけど能力とかくれるのですか？さすがに今のままだと瞬殺されますよ。高確率で」

「その辺は大丈夫です。魔法の世界では魔力は多めにしておきますし身体能力もある程度上げときますので」

「それを聞いて安心しました」

「ですけど。魔力の使い方は向こうの世界で習ってくださいね」「了解」

「あとは・・・何か欲しいものとかありますか？ある程度でしたらプレゼントしますけど。さすがに無限の剣製や王の財宝はあげられませんけど」

「いりませんよ。そんなチート。俺がほしいのは、一つ：今から言う剣。二つ：魔法の能力を雷・闇・氷の属性にする。これだけで

す」

「わかりました。それで、剣とは？」

「まずは、夫婦剣の干将・莫耶。二本目に日本刀。三本目は、可能ならエクスカリバーで」

「いいでしょう。全部お渡しします。それと、日本刀の名はいいのですか？なんなら名刀を用意しますけど」

「構いません。本当は俺が名をつけたいのですが」

「なら、これをどうぞ。まだ、名は無いので丁度いいです」

アテネは光を集め一本の日本刀を取り出し俺に渡した。その刀は、俺が見ても途轍もない名刀だと寸時でわかった。

「ありがとうございます。こんな名刀頂いて」

「かまいません。それで、その剣の名は」

「そうですね・・・氷華^{ひょうか}。氷の華と書いて氷華。どうでしょう？」

「いい名ですね。それと、あなたが寝ている間にあなたに付いていきたいという人物が入るので会わせますね」

アテネは消えすぐに戻ってきた。彼女の横には黒髪の女性が立っていた。しかも日本刀を腰に据えて

「君は誰だ？」

「名前を聞くならずは自分からだろう」

「それもそうだが、今回は断らせてもらうよ」

「そうか、確かにワタシがお前に付いてきたいと言ったからな。

ワタシの名前は伊東一刀斎だ」

「は??」

伊東一刀斎？あの一刀流の祖と言われる人が女・・・

「なんだ。ワタシが女なのがそんなにおかしいか？」

「そ、そうじゃなくて、その・・・まさか一刀流の祖が女だったとは・・・その・・・ごめん」

「別に構わん。それでお前の名は？ワタシは答えたんだ。教えてもらっていいだろう」

「そうだな。俺の名前は白銀剣斗^{しろがねけんと}。白剣流の剣術者だ。よろしく」
俺が右手を出すと一刀斎はそれを掴み握手した。
「よろしくな。剣斗」

「コホン。それじゃ、行つてらっしゃい。二人とも」
「ああ」

「世話になったな。アテネ」
そして俺達は光に包まれ消えて行つた。新たな人生へ

救出

『救出』

「お・・・きろ。・・・と」

「ん・・・」

「おきろ。剣斗」

「ん・・・ここは」

「転生した世界だ。大丈夫か？」

「ああ、だいじょうブー!!」

俺が目覚ましてみると一刀斎との顔が目の前にあった。それは俺が少し前に行くときスをしてしまうほどの距離だった。

「斎。頼むから離れてくれ。顔近すぎるから」

「詰まん男だな。ここは接吻ぐらいするもんだろ。それと、どうしてワタシのことを“斎”と呼んだ？」

「一刀斎なんて呼びにくいし、お前は女だろう。だからだよ」

俺がそう言うとき斎は少し考えすぐさま俺を見つめなおした。

「本来なら親からもらった名を代えたくないのだが、剣斗がそう呼びたいのならかわん」

「なら、これからは“斎”って呼ぶから。よろしくな」

「ああ、こちらこそ」

俺と斎は再度握手を交わした。

「それと、アテネから手紙を預かっている」

俺は斎から手紙を受け取り読み始めた。

『 白金剣斗へ

この手紙を読んでいるという事は無事に《ネギま!？》の世界に着いたようですね。一応本編の始まる十年ぐらい前に送っておきましたから十分準備ができるとおもいます。それと、あなた達

二人の身体を不老の身体にしておきましたから年齢は気にしないでいいですよ。あとエクスカリバーと干将・莫耶はあなたの影の中に入れておきましたから闇の魔法を覚える事をオススメします。といえますか、闇の魔法を覚えないと取り出せないと思いますので、がんばってください。

わたしからの報告は以上です。いい生活を

女神アテネより』

「だそうだ。取りあえず、どうする？」

「そうだな。まずは、街に行く事が先決じゃないか。ここがどんなのかもわからないし」

「そうだな。なら、さっさと行きますか」

俺達は町を探すために歩き出した。

二時間後

「ハア、ハア、ハア。や、やっと抜けたあああ！！」

「さ、すぐに、ワタシもここまで深い森だとはおもわなかったぞ俺と斎はやつと森を抜け川とその奥に見える街を見て感動を覚えた。そして、橋で川を渡るべく川岸を歩いていると

「このちゃん！！」

川の中で必死に岩にしがみついている子共と慌ててどうしてたらいいかわからずあたふたしている子共がいた。

「斎。俺は川にいる子を助けるからもう一人を頼む」

「わかった」

俺は急いで川に入り女の子を抱えながら川からあがった。

「大丈夫？このちゃん」

「う・・・うん。大丈夫やで、せつちゃん」

「少し水を飲んだようだな。それに、このままだと風邪をひくな。悪いけどこの子の家まで案内してくれるか？」

「はい、はい」

関西呪術協会

『関西呪術協会』

Side：刹那

「このちゃん!!」

私とこのちゃんは近くの川に遊びに来た。せやけど、このちゃんが石に足を取られてそのまま川の中に落ちてもうて今にも流されそう。

「まってこのちゃん。今助けに行くから「あの子は大丈夫だ」・え?」

突然うしろから声が聞こえて振り向くと綺麗な黒髪のお姉ちゃん。「ワタシのつれがあの子を助けるから、お前はここで待っていていい」

そう言われ川を見ていると男の人がこのちゃんを連れて川からあがってきた。私は慌ててこのちゃんに近寄りこのちゃんの無事を確認した。

「大丈夫?このちゃん」

「う・・・うん。大丈夫やで、せつちゃん」

このちゃんの声が弱い。それに唇も紫色で・・・

「少し水を飲んだみたいだな。それに、このままだと風邪をひくな。悪いけどこの子の家まで案内してくれるか?」

「は、はい」

男の人がこのちゃんを抱きかかえ私のあとを付いてくる。

私がつと強かったらこのちゃんを助けられたはず。今よりもつとつと強くなってこのちゃんを守るんや。

Side out

「この度、娘のこのかを助けていただきありがとうございます。」

私がこの屋敷の長をしています近衛詠春このえいしゅんといっています」

サイドポニーの子について行ったら途轍もない大きな屋敷？？に案内され。屋敷の周りには巫女さんがいて、抱いている子を見ると驚き慌てていた。俺がその子を近くにいた巫女さん預けるとその子を抱えて急いで屋敷の中に入って行つた。おそらく風呂場に行つたのだろう大分体が冷えていたからな。屋敷にあの子を入れるのを見届けると別の巫女さんに「長が会いたがっていますので、お入りください」と言われ入ってみると渋いおじさんが待っていた。

「当たり前のことをしただけですよ。俺の名前は白銀剣斗といいます。隣のはつれの」

「伊東斎だ。すまないと思うが、剣斗も濡れているのでなあこの後でもいいから風呂に入れてくれぬか？」

「構いませんよ。ついでに服も乾かしておきましょう。どうぞ彼女について行つてください」

「どうぞ。こちらです」

言われるまま俺はその巫女に付いて行つた。屋敷もでかかったら風呂もでかかった。だいの大人が十五人は入れるくらいの大きな檜風呂だった。

そして、風呂から上がった俺は用意されていた服に着替えて斎達が待つ部屋へと戻つた。

「お風呂ありがとうございます。近衛さん」

「詠春でかまいません」

「なら、俺も剣斗でかまいません」

「わかりました。それと、伊東君から聞きましたよ。白銀君達は住む家が無いようですね。よかったら家でくらしませんか？」

「俺は構いませんけど。いいのですか？見ず知らずの俺達を住まわせて？」

「剣斗君達は私の大事なこのかを救ってくれた。それだけで、十分な理由になります」

詠春さんの話を聞いて俺は少し考えていると隣にいる斎が小さく

頷いて見せた。この姿を見て俺の腹は決まった。

「わかりました。これからよろしくお願いします。詠春さん」

「こちらこそよろしくお願いします。それで、剣斗君達にはこのかの護衛もお願いしたいのですが？いいでしょうか？」

「いいですよ。俺達も何もしないでこちらに住まわせてもらうわけにはいきませんし。それと、詠春さんには話しておきたい事もありますから」

そして、俺は詠春さんに俺と斎が別の世界から来た人間である事を話した。最初は詠春さんも信じられない顔をしていたが、俺の真剣な顔を見て信じてくれて俺達に魔力の使い方を教えてくれる事になった。

模擬戦

『模擬戦』

俺と斎が近衛家の屋敷に厄介になつてはや半年が過ぎた。詠春さんの会話の後助けたこのかからお礼の言葉を受け今ではすっかりの仲良しだ。このかも俺のことを「剣兄」と呼び斎のことも「斎姉」と呼んでいる。たまに三人で買い物に行くとき知らぬ人から三兄妹と間違われる事も多々会ったりし、その度に斎が「兄妹ではない！」と言っているが多分無駄な行動だと思う。だから、俺はもう諦めている。

そして、今から俺達は朝食を食べようとしているのだが・・・

「なあ、このか」

「なんや？ 剣兄」

「どうして、俺の間に座っているんだ？」

「ウチがここに居たら迷惑？」

「うつー!!」

ずるい。このかが俺の間に座っているから確実に上目遣い。これで、涙目にされたら・・・

「剣斗。お前の負けだ諦めろ」

「斎。頼むから義理の姉としてここは叱ってくれ」

「ワタシは姉ではない！！それに、そんな事をしたらこのかが泣くぞ。そうなれば・・・わかるだろう」

俺がこのかを見ると涙目で俺を見てくる。この顔を見たら断れる男はいない。

「仕方が無い。降参だ、このか。その代り好き嫌いせず全部食べるんだぞ」

「うつー!!」

うつー癒される。この笑顔を見ればお父さんは今日も頑張れる

ぞって、誰がお父さんだ！！そんな、ノリ突っこみをしていると詠春さんの背中から黒いオーラが・・・

「このか。その笑顔詠春さんにも見せてあげて」

「わかったわ。お父様（ニコ）」

「ブウ~~~~~！！！」

「~~~~~長あ~~~~~！！！」

このかの笑みを見て詠春さんは豪快に鼻血を拭いて倒れた。周りにいた人達は急いで詠春さんの所に行き容態を確認するが、詠春さんの顔はとても満足そうな顔だった事だけは報告しておこう。

さて、詠春さんの鼻血騒動も落ち着き俺と斎は道場で軽く素振りをしている。もちろん真剣で。本来なら神鳴流の門下生と一緒にやるべきなのだが、俺は白剣流に斎は一刀流の祖のため詠春さんの誘いを断った。そして、門下生のいないこの時間だけ斎と一緒に鍛錬している。無論詠春さんの許可は得ているし偶に神鳴流の人が俺と斎の稽古を見ていることもある。そして今斎が持っている刀は名を烈火一文字と言うらしくあの上杉謙信の愛刀姫鶴一文字の姉妹刀だと斎は言っているが・・・本当なのか？

「剣斗。そろそろいいではないか？」

「そうだな。やろうか、斎」

程よい汗をかいて俺と斎は四歩半づつ離れ己の刀を向ける。このかを助けた日から毎日欠かさずやってきた模擬戦だ。

「今日は俺が勝たせてもらうぞ。斎」

「それは、ワタシに本気を出させてから言うもんだぞ。剣斗」

言葉の終わりと同時に斎かものすごい殺気を感じる。俺はその殺気を払いのけて斎に向けて切りかかる。しかし斎はそれを意図も簡単に受け止め俺に蹴りを入れてくる。その蹴りを鞘で受け止め足を払いのける。これが俺の流派白剣流の戦い方。

模擬戦が始まって約10分が立つ。斎の一撃は受けるたびに強く重く感じてくる。これが斎の伊藤一刀斎の力だと日々感じているが、

今日こそは勝つ！！

「斎。俺はそろそろ限界に近い。次の一撃で勝負をつけないか？」
俺は氷華を鞘にしまい抜刀術の構えに入る。

「・・・いいだろう。こい！！剣斗」

「はあああああ！！」

斎も抜刀術の構えと同時に俺は自分の出せる最速の速さで斎に切りかかる。そして・・・

「・・・引き分けか」

「ああ」

「剣斗もなかなかの剣客になってきたな。あとは「経験か」そう
だ」

「経験は豊富だとおもったのだがな」

「まだまだだ。だが、すぐにワタシに追いつくだろうな」

「斎に言われると自身がつくよ」

「うぬぼれるな！！」

斎は俺の頭を鞘で叩いて行った。けど、その去り際の顔は笑っている顔だった事は俺だけの秘密にしておこう。

旅立ち

『旅立ち』

どうも、詠春さんのところに居候して一年が経ちました。やっと斎にも勝てるようになってきて魔法も陰陽道の式紙召喚と呪返しならある程度出きるようになりこの一年はとても充実した一年でした。そして、俺と斎は詠春さんに呼ばれて本堂の一番奥の部屋にいます。

「詠春さん。話してなんですか？」

詠春さんは真剣な眼差しで俺達の事を見つめ決心したのか俺達に話し始めた。

「話とはこのかのことなのです。実は、あの子を義父さんのいる麻帆良学園に行かそうと思います」

「このかを関東に送る事はまずいじゃないですか？」

「確かに。あの魔力量を関東が見過ごすはずも無いだろう」

「それはこちらと同じ事です。このかの魔力を使って強行派は鬼神を甦らそうという情報も得ています。だったらいつその事このかを関東に行かせた方が」

「それだと、このかが悲しくなるのではないですか？ たった六歳で親元を離れさすなんて、普通ならありえませんかよ」

「だとしても。このかを危険な目にあわせるわけには行きません。あの子には裏の世界を知って欲しくないのです」

「それは無理だな」

詠春さんの言葉を聞いて斎は否定した。俺も同意見だ。詠春さんの昔話を聞いてあの人も英雄の一人である事は知っている。だから、このかも英雄の娘と考えると関東の魔術協会も黙っていないだろう。なんらかでこのかを裏の世界に入れるはずだ。

「だから二人にお願いです。このかと一緒に学園にいつてk「お断りします」なぜです?!」

俺の言葉を聞いて詠春さんは驚いた顔をしている。しかし、それにはちゃんと理由がある。

「詠春さん。確かに俺と斎は詠春さんのおかげでここに住まわせていただいています。このかも兄妹だと思っています」

「だつたら、なぜ?」

「実は一度魔法世界に行つてみようと思ひまして」

俺の言葉を聞いて詠春さんは驚きの顔を見せたがこれは決定事項だ。

「・・・わかりました。剣斗君の気持ちはホントのようすしかのかの護衛兼保護者は諦めます」

「すみません。けど、このかが中学になるまでには帰ってきますのでその時はこのかの護衛兼保護者やりますよ」

「そう言つて貰えると助かります。それでは明日はこのかと剣斗君達のお別れ会でもやりましょうか?」

「別にいいですよ。必ず帰ってきますから」

次の日

このかが麻帆良学園に向けて車で行つた。別れ際にこのかが泣いて俺のどこに來たので前世から首に下げていた十字架をこのかに渡した。「俺のお守り必ず取りに行くから。それまで大事に持つてくれ」とクサイ言葉をこのかに言い。俺達は笑顔でこのかを送つた。

「さて、俺達も行こうか」

「そうだな。当分この景色と見納めか」

「大丈夫ですよ。剣斗君と斎君の家は此処ですから。いつでも帰つてきてください」

詠春さんの言葉を聞いて俺と斎は小さく頭を下げ魔法世界に向つた。

帰等

『帰等』

このかの入学式の始まる一ヶ月前に俺と斎は魔法世界から日本に帰って来た。これは詠春さんとの約束を守るために帰ってきたわけだが、まずは京都にいる詠春さんに会いに行くことにした。

「剣斗。早く行こう」

「待て太陰。斎、なんとかしてくれ？」

「あいつはお前の式神だろう。お前が何とかしろ」

まさかの援護なし。俺は仕方なく急いで太陰のあとを追った。太陰は十二神将の一人で風将。見た目はどう見ても小学生なのだが俺より年寄り。詠春さんに式神を教えてもらってためにし詠んでみたら太陰が出てきた。名前を聞いて俺と詠春さん驚いたよ。だって十二神将だもんそりゃ驚くって、普段は不可視の風で見えないようにしているのだが魔法世界に行ってからそんな事せずにいたらこっちの戻ってからもしなくなった。おかげで戸籍とか偽造するのに手間取ったが

「都も久しぶりよね。あそこの餡蜜屋まだやっているのかしら？」

「太陰。まずは詠春さんのとがさきだよ」

「わかってるわよ。わたしだってその辺は弁えているつもりだから」

「それならいいが」

俺らは久しぶりに我が家に向けて歩いて行った。

Side：詠春

この前手紙が来て約六年ぶりに彼かが帰ってくる事を知り屋敷いる女性人総出で料理に仕度をするとかで、男の私達はお払い箱状態

です。私本当にここの長なのでしょうか？剣斗君のほうが長に向いているのでは・・・

「長。先ほどからなにをお考えになられているのですか？」

「いえ。ただ、ここの本当の長は私ではなく剣斗君なのではないかと思ひまして」

「確かに、女性人総出で料理をするとかワタシは聞いた事がありません」

「悲しくなってきましたね」

「長。それは言わないほうがいいです」

「それもそうだ「長！」。どうかしましたか？」

「彼らが帰ってきました」

「本当ですか？」

「はい。もう間もなくこの部屋に来ると思います」

「わかりました。皆さん歓迎の準備を」

「「はい」」

男ばかりですが、彼なら大丈夫でしょう。すると、襖が開き待ちに待った三人が入ってきました。三人？？

Side Out

やっと帰ってきた我が家。なんでも女の人達は総出で料理を作っているらしい。今日は何か特別な日だったかな？

そんな事を気にしながら俺達は詠春さんの待つ奥の部屋にやってきた。襖を開けて入って行くと詠春さんと神鳴流師範代の人がいた。

「ただ今戻りました。詠春さん」

「お帰りなさい。剣斗君、斎君。それと太陰様」

「詠春。別にわたしの事は様付けにしくてもいいのに」

「いいえ。十二神将の一人太陰様を呼び捨てになど私にはできません」

「かたいなあゝ。剣斗と斎は普通に読み捨てなのに」

「ははは。仕方が無いよ太陰」

俺は笑いながら優しく太陰の頭を撫でてやる。太陰も撫でられると目を細めてうつとりしはじめそのまま俺の膝の上に腰をかける。本当に可愛い奴だ。

「それで、魔法世界では何か収穫はあったのですか？」

「ええ。ある程度の西洋魔法は」

「そうですか」

詠春さんが頷いていると俺の後ろから斎がとんでもない発言をした。

「それだけじゃない。剣斗は向こうでは二代目サムライ・マスターと呼ばれさらに聖剣の騎士とも呼ばれている」

「二代目・・・サムライ・マスターですか・・・」

斎の言葉を聞いて詠春さんは少し戸惑っている。先の大戦で自分につけられた名がまさか俺に二代目と言う名をつけて呼ばれるとは思っていなかったのだろう。

「・・・いいじゃないですか。二代目サムライ・マスター白金剣斗。その二代目をお願いします」

「わかっています。このかの護衛の件ですね」

「はい。このかに危害を加えるようでしたら容赦なくやって下さい」

「それは魔法に関わらせようとした奴も？」

「故意に関わらせようとするなら・・・」

詠春さんの目は本気だった。

「わかりました。けど、偶然もしくは事件に巻き込まれて知ってしまった時は俺はこのかに魔法を教えますよ。いいですね」

「構いません。このかの事よろしくお願いします」

詠春さんは俺達に頭を下げてお願いしてきた。別にそこまでしなくても引き受けたが、これは詠春さんなりのケジメだと俺は思っている。

その後は豪華な料理と共に酒を飲み魔法世界での出来事を夜遅くまで話し込んで行った。

麻帆良学園

『麻帆良学園』

ええ……ただ今麻帆良学園の学園長室の前にいます。正直言つてこの麻帆良学園の広さを舐めていました。来た時は普通の学園より広いだろうと思っていたら全然違う。ここはもう都市。駅員にこの場所を聞いたら白い目線で見られて「今年からここで教師する事になりました。白金です」と答えたらすぐさま教えてくれた。何を想像していたのか……。

「入らないのか？ 剣斗」

「入るよ」

マナーとしてノックを二回したら中から声が聞こえたので入つてみると部屋の中には眼鏡をかけたおっさんと妖怪ぬらりひょんがいた。

「剣斗。この時代にもまだぬらりひょんは存在していたぞ」

「フオー!!」

「取りあえず生け捕りにしてテレビにださせるか」

「フオー!! フオー!!」

「君達。学園長を虐めるのもその辺にしてくれないか？」

眼鏡をかけたおっさんが苦笑いしながら頼んできた。仕方ないから今回はここまでにしよう。

「初めまして。近衛詠春さんのところから来ました白銀剣斗です」

「ワタシは伊東斎だ」

「ワシはこの学園の学園長をしており近衛近右衛門じゃ」

「僕は高畑・T・タカミチ。一応この学園の英語を教えているよ」
この人が詠春さんと同じ大戦の英雄の一人か。あまりパツとしな
いけど力はこの学園の中で一番か。

「それにしても、婿殿もなかなかの者をよこしてくるのう」

「そうですね」

「はっ？」

「おや？聞いておらんかったか。この麻帆良学園にはときたま侵入者が現れてのう」

「それを僕等魔法に関わる人達が撃退しているのだよ」

「つまり俺達にもそれに参加しろと？」

「二代目サムライ・マスターと言われておる君n「お断りします」最後まで言わせてもらえぬかのう」

「俺達が此処に来たのはこのかの護衛です。もし、その侵入者がこのかに危害を加えるのなら力を貸しましょう。しかし、このかに関係の無い者なら貸す必要はありません」

「しかしのう。お主も加わってくれたらそれだけで他の生徒も安全に暮らせるのじゃが」

「そんなこと知りませんよ。俺達はこのかに魔法を知られなかったらいいのです。それと、もしこのかに故意に魔法を裏の世界に入れようとするのなら例え学園長でも殺しますよ」

「フオツ！！」

俺は学園長に殺気をぶつけ自分は本気で殺すとその覚悟を知らしめた。

「わ、わかった。わかったからその殺気を収めてくれ」

わかったようなので殺気を収めてやるとジジイの頭から冷や汗が大量に流れていた。隣にいる高畑先生も汗を掻いている。

「年寄りには大事にするもんじゃぞ」

「知るか！！それで、俺達の仕事は？」

「そうじゃ、そうじゃ。二人にはここの数学と古典の教師になつてもらう」

「わかった。それと住む場所はもう決まっているからわざわざ決めなくていいぞ」

「フオツ！！」

「それと入学手続きしたい奴いるからくれないか？」

「誰を入学させるきじゃ？」

「娘だが。それがどうした？」

「娘がおったのか」

ジジイが俺と齋を見てニヤニヤしている。こいつ殺していい??
いいだろう。今後のために

「娘と言うが、戦争孤児だ。向こうの世界でたまたま見つけて剣斗になついたから連れてきただけだ。別にワタシと剣斗の子では無いぞ。ぬらりひょん」

「そうかそうか。それなら構わんど。手続きはこちらで済ませておこう」

「それじゃ、俺達はもう帰るから」

「待ってくれ。やはり警備n「却下だ!!」う、うむ」

俺は声と共に学園長室を出て行った。今日はホテルに泊まって明日は生活秘術品を買え揃えないといけないな。だって部屋には布団も何も無いのだから。それに太陰に学校に行くことも教えておかないと。あいつビックリするだろうな。

入学式

『入学式』

Side：このか

お久しぶりです、近衛このかやで。お父様の命令で麻帆良学園に来てもう六年が立ちウチも今日から中学生になりました。親友のアスナのおかげで小学校は楽しく生活できたけどやっぱ剣兄と斎姉がないと悲しかったわ。

「なにやってるの？このか。早く行かないと遅れるわよ」

「あつ！！待ってなあゝゝ」

「・・・であるため。皆頑張るのだぞ。フオ、フオ、フオ」

おじいちゃんの長いあいさつがやっと終わったわ。隣にいるアスナなんて最初から眠っていて全然聞いてないし。次は新任の先生の挨拶やな。どんな先生ややる・・・うそ！！

「ええゝゝ新入生の皆さん。ご入学おめでとうございます。今年よりこの麻帆良学園本校女子中等部の数学を教える事になりました白銀剣斗と言います。私は1-Aの副担任もやらせてもらいます。どうぞよろしくお願いします」

パチ、パチ、パチ・・・

剣兄のあいさつが終わり周りから拍手の音が聞こえてくる。けど、今のウチには関係あらへん。あの剣兄と一緒に学校にいける。あとは、斎姉やな。どこの学年になるんやろ？

「伊東斎と言います。ワタシも白銀先生と同じく1-Aの副担任をやらせてもらいます。担当教科は古文です。どうぞ、よろしくおねがいします」

パチ、パチ、パチ・・・

ウチの学園生活最高の始まりや!!

Side Out

「ここが1 - Aですか？高畑先生」

「そうです。ここの生徒と一年長くて三年は同じ生徒は一緒ですよ」

「あははは」

俺の問いに高畑先生は苦笑いをして返してくる。どうして俺が呆れているかというのアレだ。学校では定番のトラップ黒板消し落とし。まさか初のHRで仕掛けられているとは、胃薬が必要だなこれは「剣斗。いいか早く入るぞ」

「斎。頼むからここでは白銀先生と言ってくれないか？」

「善処しよう」

「それで、初のHRでこれですか」

「はあ~~~~」

俺は諦めて扉に挟んである黒板けしを取り教卓のほうへ向った。どうして俺が先頭なんだ？？

「全員席に着くよう。早く連絡事項終わらせてたら残り時間質問タイムにあげよう」

「さすが先生。わかってる!!」

あいつは確か朝倉和美だな。カメラ持っているってことは何かたくらんでいるな。

「・・・・で以上です。質問とかなければ約束どおり質問タイムにはいりましょう。質問ある人？」

「・・・はい!!」

全員か!?

「ははは、これは困りましたね。どうしよう?」

「出席番号順に質問させてみればどうでしょう?」

「それが、いいですね。では、赤石君」

「白銀先生と伊東先生歳はいくつですか?」

「今年で23です」

「ワタシは22だ」

「誕生日いつですか？」

「7月5日」

「9月1日」

「彼女彼氏いますか？」

「黙秘!!」

「白銀先生ズバリ。このクラスの中に気になる子はいますか？」

「そうだな~~~~近衛だな」

「「「おお~~~~」」」

「その理由は？」

「近衛とは一時期一緒に暮らしていたからな。あの近衛がここま
で美人になるとはおもわなかったよ」

「これは脈アリと考えていいでしょうか？」

「それは黙秘で」

このあと色々質問されチャイムと同時に終了した。仕事が終わっ
たらこのかに会いに行くでしょう。

このかとの再会

『このかとの再会』

Side：明日菜

おかしい？？寮に帰ってからこのかの様子がいつもと全然違う。さつきから首にかけているロザリオを眺めながらニコニコと笑っているし。何時ものとはちよつと違う大人びた服を着ている。

「このか。何か良いことでもあった？」

「え？そんなことあらへんよ」

「そ、そう？」

「そうや。おかしなアスナやな」

ダメだ。完全にいつものこのかじゃない。すると扉からノックの音が聞こえたから扉を開けてみると白銀先生と伊東先生、同じクラスの白金さんが立っていた。

「こんにちは。すまないけど、このかはいるかな？」

「はい、今呼びますね。このか、白銀先生がk「剣兄！！」
はや！！」

「おつと！！久しぶりだなこのか。見違えたぞ」

「そりや六年振りやもん。ウチかて大きくなってるわ。けどな、そんなん関係ないねん。ウチな、剣兄から預かったロザリオ大事に持ってたんよ。毎日肌身離さず持って・・・たんよ」

「そうか。えらいなこのかは」

「う・・・うええええええええええ・・・」

このかが白銀先生の胸の中で泣き出した。このかの泣き声に部屋にいた皆が何事かと思ひながら出てきたのは当たり前。さすがにこれは不味い。伊東先生もそう思ったのか白銀先生に中に入るように言った。

「剣斗。取りあえず中に入ろう」

「そ、それもそうだな。悪いな神楽坂。部屋に入れてくれないか？」

「ど、どうぞ」

取りあえず先生達を部屋の中にいれお茶を出し座った。

「HRでも言っていた事はホントだったのですね」

「別に敬語じゃなくていいぞ。俺もその方がいいし」

「わかったわ」

「それで、剣兄達は今までどこにおったん？」

「世界中あちこちさ。それと太陰は俺の妹みたいになっているからこのかから見ると義理の妹感覚でいいぞ」

「ほんまに！！よろしゅうな。太陰」

「よ、よろしく」

「あかん。めっちゃかわいいや~~~~ん。剣兄この子ウチにくれへん？」

「このか、太陰はモノじゃないぞ」

「いいやん。剣兄のいけずう~~~~」

このかがすごく良い笑顔で笑っている。わたしと会って今まであんな笑顔余り見せなかったのに白銀先生がきたらそれが普通の顔のように笑い続けるなんて。

「・・・スナ。・・・てる？」

なんか嫉妬しちゃうな

「アスナ。聞いてる？」

「え！？なに??」

「だから、剣兄がこれからご飯食べに行こうやって。アスナも一緒に行けへん？」

「え！！でも、久しぶりの再会ならわたしみたいな知らない人いないほうが」

「何言ってんだ。ご飯は大勢いたほうが楽しいだろう。それに俺らがいない間このかと一緒にいてくれたお礼もしたいんだ。来てくれるだろう」

「そ、それじゃ、お言葉に甘えて」

「そうと決まれば行くで。剣兄。ウチのオススメ屋台に連れて行って上がるから期待しててや」

「それは楽しみだな」

このかは白銀先生の手を引つ張って寮を出たけど明日はクラスの皆にどう説明するつもり??わたしにも被害出ちゃうじゃない。

鬼退治

『鬼退治』

入学式から数日が立ち俺らも教師としてまずまず出来るようになり今日も俺は学年主任の新田先生と色々と授業の事を話しているうちに夜遅くまで学校にいた。

「参ったな。正直ここまで遅くなると思わなかった。新田先生の話少し長いもんなあ」

腕に着けている時計の針は夜の11時を指している。さすがにこのかもこの時間なら寮に帰っているだろう。

時計を見ながらこのかの事を考えていると学園のあちこちから複数の魔力を感じた。この禍々しい魔力は鬼の類いのモノか。さすがにこの数は厄介だな。

（斎。感じてるか??）

（ああ。鬼の類いの魔力を）

（恐らく呪術協会の強行派だろう。身内の不始末は身内でやるか）

（それで、どうする??ワタシも行った方がいいか??）

（いや。必要になったら召喚するから太陰と一緒に準備して欲しい）

（わかった）

さて、このかに害するモノは死んでもらうか

S i e d : 桜咲

お嬢様を護るために修行をして、お嬢様と同じ中学になりやっとお嬢様を護れるようになった。しかし、お嬢様は私よりも新任の白銀先生や伊東先生、同じクラスの太陰と一緒にいる事が多い……。

ううん。今はそんな事考えているより仕事、仕事。

「どうした？桜咲」

龍宮が私を見ている。

「なんでもない」

「不安なら帰っても構わない。一瞬の緩みが敗北の原因になるからな」

「わかっている」

不安はない。この仕事もお嬢様の護衛も兼ねている事もわかっている。大丈夫問題n

「?!?」

「桜咲」

「わかっている」

魔力を感じた私と龍宮は戦闘の準備を始めた。そると目の前に鬼共が召喚された。

「ほ、ほう。ワシ等と勝負するみたいじゃのう」

「どれどれ。ちよつと肩を揉んでやろうか」

「黙れ!!ざんがんけん斬岩剣!!」

私は目の前にいる鬼を切り裂ていき後ろから来る鬼は全て龍宮が射ち抜いてくれる。だから私は前の敵だけを撃てばいい。ただ、それだけだった。

「ハア、ハア、ハア……」

おかしい。あれから30分ほど立っているはずなのに全然数が減らない。むしろ増えてる。さすがに、もう体力が……

「刹那!!」

「え??あつ!!」

龍宮に叫ばれて私の目の前に鬼の金棒が振り下ろされていた。私

このまま死ぬんだ。ごめんねこのちゃん。このちゃんを守って上げられなくて……

「……………」

私が目を閉じて待つていても金棒は来ない。恐る恐る目を開けてみるとそこには光り輝く西洋の剣で金棒を受け止める白銀先生がいた。

「全く。他の場所には先生が居たのに一番数の多い此処にはいないとわな。大丈夫か？桜咲」

「あ……はい」

「それはよかった。お前等、俺の生徒に手を出した覚悟は出来るだろうな？」

白銀先生。それはちよつと違いますよ／＼

「今度はお前か」

「貴様はワシ等を楽しませてくれるのか？」

「ああ、全員黄泉の国に送ってやるぜ。召喚！！！白銀剣斗の従者。伊藤一刀斎！！十二神将太陰！！」

先生！！あなた二人も契約しているのですか！！

Side out

「ああ、全員黄泉の国に送ってやるぜ。召喚！！！白銀剣斗の従者。伊藤一刀斎！！十二神将太陰！！」

二人を呼び出すと桜咲も龍宮も驚いた顔をする。確かに今の魔法使いの契約は将来の相手のみと考えられているみたいだが本来は主人の盾でありサポートする事が役目だ。斎といつしたかつて？？そんな魔法世界に行ったときにだよ。どっちが従者かでもめる事無く契約し……そこ、カッターナイフを投げようとしな。危ないだろう。

「やつと呼ばれたか」

「本当よ。わたしだって久しぶりに全力を出したいわよ」

「すまない。けど、一番多いところで呼んだんだからいいだろう」
「そうだな。こいつも偶には血を吸わせておかないと機嫌が悪くなる一方だ」

・・・怖いな、烈火一文字。太陰なんてガタガタに震えているぞ。
「さて、お前等。黄泉に送られるか」

「烈火の塵となるか」

「選ぶがいい!!」

「ちよつと!!わたしのセリフは??」

「お前は後方支援だ」

「なんでよ!!」

「お前も血に塗られたいか」

「ごめんなさい」

「ならいい」

斎、怖えええええ

「さつきからワシ等の事を空気にして・・・ヤロウ共!!あいつらを血祭りにするぞ」

「「「「「おおおおお!!」」」」」

鬼達が一斉に掛かって来た。まあ、相手がいくらいても俺と斎には関係ないけどね。

「「はあああ!!」」

俺と斎は来た鬼に一太刀いれ次々に消滅していく。その剣捌きは自分で言うのは恥ずかしいがまるで舞のように捌き全てのものを魅了する動きを俺達はした。

鬼を倒して行くうちに数も徐々に減っていき鬼達の動きが止んだ。

「どうした??」

「どうやら時間切れのようだわい。おぬし等の勝負はまたいづれじゃのう」

「そうか。なかなかいい戦いだっただぞ」

「貴様もな。名前を聞いても構わんか?」

「ワタシの名は伊東斎。一刀流の使い手だ」

「伊東斎。いづれまた剣をぶつけ様じゃないか？」

「ああ。いづれまた」

「ふふう、はははは・・・」

鬼達は笑いながら消えて行った。・・・俺泣いて無いもん。最後のほう空気だとしても泣いて無いもん。

「ゴッン！！イター！！」

「ニコニコ」

「すみません」

なぜか太陰に拳骨をくらいました。

呼び出し（朝）

『呼び出し（朝）』

昨日鬼を退治した朝、ジジイから連絡があり学園長室に入る俺と斎、太陰。中には高畑先生と昨日助けた龍宮と桜咲までいる。

「なんのようだジジイ。俺は一時間目からFクラスで授業があるんだ」

「ワタシもCクラスで授業がある」

「そう焦らすな。昨日の件で二人がお礼を言いたいと申してのう」
ジジイからそう聞くと龍宮と桜咲が一步前に出てきた。

「白銀先生、伊東先生、太陰。昨日はありがとうございました」

「おかげで助かりました」

「別にいいさ。生徒を助けるのも教師の仕事だろう」

「ですが・・・」

「それに。あそこに魔法先生がいたら俺は助けに行かなかったし」

「「へ？？」」

なぜって顔だな。まあ、当たり前か。

「俺達が魔法関係者だと知っているのは、ここにいるジジイと高畑先生しかないんだ。まあ、昨日の一件でばれたがな」

「どうせわたし達を今夜どっかに呼び出そうと思っているのでしよう」

「フオー!!」

凶星かよ!!

「俺達は行かないからな」

「な、なぜじゃ?！」

「昨日はたまたま龍宮達生徒だけだったからだ」

「それに、さっき剣斗は先生が居たら助けに行かなかったと言っただろう。それにワタシ達は西の者だぞ」

「!?!」

斎の言葉を聞いて桜咲は殺気を出して俺達をにらめつけてくる。
痛くもかゆくも無いけどね。

「どうしてもダメかのう」

「ダメだ・・・いや。条件を飲んだら行つてやる」

「フオ!! 条件とはなんじゃ」

喰い付くな。よほど行かせたかったのか。どうでもいいけど。

「この学園には闇の福音がいると聞いているが、そいつに合わせろ」

「!?!」

「それが呑めないなら俺達は行かない。どうする」

「フム・・・よかるう」

「学園長!!」

「よい。あやつにはワシが話を通しておく。それでしょうか? 白金先生」

「構いません。それで場所と時間は?」

「今日の深夜0時。場所は世界樹前広場じゃ」

「了解。それと龍宮に桜咲。早く行かないと遅刻だぞ。遅刻したら分かつているだろう」

「ザアー」

二人は急いで部屋を出て行った。廊下を走るな。

「どうしたのじゃ?」

「なに、遅刻したら俺と斎の授業で難問を当てるだけだ。太陰、お前も例外じゃないぞ」

「は~~~~い」

俺達はそのまま学園長室を出ていった。

Side: 近右衛門

「ふう〜。なんとか来てもらえそうじゃわい」

「そうですね、学園長」

「しかし、まさかエヴァに会わせるとわのう」

「彼が考えている事はまだわかりません。それに昨日も僕が途中から来ていたことも気づいていたみたいですし」

「ワシが覗いているもの気づいておったのう。いやはや嬪殿もやつかいですごい者をよこして来たのう」

「味方だと心強いですけど敵だと怖いですね」

「どうしたもんか」

取りあえずエヴァに連絡するかのう。エヴェも応じてくれるといのじゃが・・・ワシこのまま死んじやって構わんかのう

（それがいい）

「フォー!!」

（そのまま死ねば。そのほうがこのかも助かるし）

「フォー!!フォー!!」

「どうしたのですか？学園長」

「ワシ。プライベートないみたいじゃ」

「???」

呼び出し（夜）

『呼び出し（夜）』

眠い。もし、俺に睡眠を与えてくれる人がいたらその人の願いを叶えて上げよう。

「剣斗、何を考えている??」

「この後には起こる不幸について」

「……諦める」

「ああ〜。この世には神は潜在しないんだあ〜」

「神はいるだろう」

とある神殿

「ハックシュツン!!」

「風邪かい??」

「ズズ。多分ね」

広場

広場に行ってみるとそこには数多くの魔法関係者がいた。もちろん桜咲と龍宮もいた。

「フオ、フオ、フオ。よく来たのう」

「黙れジジイ!!このまま黄泉の国に送るぞ」

「フオッ!!」

「おい君。学園長に向かってなんてことを言っただ」

「あなたは?」

「ワタシはガンドルフィーニ。君と同じ魔法先生だ。君が最近噂

になっている二代目サムライ・マスターなのか？」

「黙秘で」

「きさま！！いいk「だまらんか！！」しかし学園長」

「ワシの言葉が聞けんか??」

さすががこの最高権力者、一発でガングロが黙つよ。他の先生、生徒これで大人しくなるだろう。多分

「すまんのう。君達が西から来たと知って少しのう・・・」

「どうでもいい。もともと関東と関西の中の悪さは知っているし俺達は別に麻帆良をどうこうするつもりもない」

「それならよいが。それと昨日は我が生徒を助けてもらってありがとう。ここにいる全魔法関係者の代表して感謝する」

「別にいい。それに朝も言ったがあの場合に魔法先生がいたら俺達は助けに行かなかった」

「・・・なっ！！」

思い通りの反応だな、おい。なぜ、ありえないって顔ばかりするんだ。

「君は立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指してないのか？」

「俺達は西の者だと学園長から聞いたでしょう。そんな俺達がそんなモノ目指すわけがない」

「しかし、君は二代目サムライ・マスターと呼ばれているじゃありませんか」

ウルスラの生徒が話してくる。正直言つてウザイ。

「それは、元老院が勝手に言っているだけだ。俺は一度もそう名乗った覚えがないし、これからも名乗ることはない。そんな称号もらうより、俺は俺を知っている奴を守るほうがいい。それで死んだのなら本望だ」

俺が暴走しようとするのと斎と太陰が止めに入ってくる。

「クッ！！ジジイ！！約束通り会ったから俺はもう帰る」

「ちよ、ちよっと待つんじゃ。おぬし等の力をまだ見ておらぬ。

どうか、この中の誰かと戦ってくれぬか？」

「はっ?!ここに居る奴じゃ役不足もいいとこだ」

「それはタカミチもかのう」

「あたりまえだ。高畑先生ですら太陰に一撃も与えられない。もし高畑先生が勝ったら俺達も夜の警備員をしてやるよ」

俺の言葉に他の魔法使い勝った気になっていたが、太陰は十二神将の一角だ。負ける要素など無い。

「いいじゃろう。タカミチもそれでいいか？」

「良いですよ学園長」

「太陰。本気でやってやれ」

「ホントに??やった!？」

太陰は久しぶりの本気の戦いに嬉しがっている。間違えたかな??

太陰と高畑先生が正面に立つ。おそらく太陰は一撃で決めてくれるであろう。じゃないと高畑先生の身が危ない。

「はじめ!!」

学園長の声と共に高畑先生の居合い拳が太陰を襲い砂埃が舞う。

魔法使い共はこれで決まったみたいな顔をしているが

「・・・まさか、生徒にコレを防がれるとは思ってもいなかったよ」

煙の中から太陰が無傷で出てくる。防いだと言うより風で守ったって言ったほうがいいかな??

「舐めないでよ。わたしは十二神将の一人、風将の太陰なのよ。」

こんな拳いくらでも防いで上げるわよ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

・・・ばか

「それはどうゆう事かのう??白銀君」

「そのまんまの意味ですよ。太陰は十二神将です。ただ、それだけですよ」

「それをなぜいawn」

「言う必要はない」

「・・・その勝負やめじゃ!!」

「どうしてですか??学園長」

「どう足掻いても高畑君の勝ち目なんてあるわけなからう。相手は日本最強の陰陽師安倍清明が使っていた式紙じゃぞ」

「それが、どうしたのです。高畑先生は大戦の英雄。例え相手が清明の式紙だろうとも勝てます」

「いや。僕じゃ勝てない」

「なっ!!」

「白銀君。君は太陰と主従関係はキッチリしてるのかい??」

「もちろんだ。清明は人を傷つける事を禁じたが、俺は禁じていない。このままいけば高畑先生の命はなかったかもしれないぞ」

「ほらね。この勝負は僕の負けだ。まさか神将を呼び出すとは」

「俺も予想外ですよ。それじゃ、俺達は帰ります。学園長約束守ってくださいよ。それと太陰、帰ったら覚えてろよ」

「うっ!!」

お仕置きは何がいいかな。・・・そうだ。餡蜜を太陰の前で美味しく食べよう。そうしよう。

Side 近右衛門

「どうしたらようかのう」

「そうですね」

「何を言っているのですか、学園長。彼等をなんとしても警備員にさせるべきです」

「じゃがのう・・・」

「そうですね。あの人達が入ってくれたら百人力です」

「しかし、白銀君達は断ったしのう」

「彼等も話せばわかってくれます。ですから・・・」

「取りあえず。この件はワシが預かる。それでよいのか?」

「ええ、かまいません」

「それで、あの人達が来てくれるのなら」

何とかその場を回避できたが、どうしたものかのう。さっきまでアレほど批判していたのに困ったのう。どうすればいいのじゃ？？

普通 魔法使い

『普通 魔法使い』

どうも、白銀剣斗だ。昨日は学園長との約束で他の魔法先生会つて太陰の招待がばれるは朝学園長室に行ったら闇の福音とはまだ連絡が取れないと言われるは散々だ。

そして、今俺はこれから授業を始めるためAクラスの教室の前にいる。ここまで聞いて判る人は判るだろう。そう誰もが一度はやった事がある黒板消し落しだ。まだチャイムが鳴っていない教室の扉に黒板消しが挟まっていて教室の中では他にも罨を仕掛けている声が幾度もなく聞こえてくる。さて、ここはどうしたものか……考えているとチャイムが鳴ったので取りあえず黒板消しを取りドアを開け通路に張つてあるロープを無視して教卓の前に立った。

「それじゃ、授業を始める」

「起立……礼」

「……おねがいします」……

クラス委員の雪広の号令で全員が挨拶をする。このクラスで生徒が立つのは俺と斎、高畑先生と新田先生だけだそうだ。まったく困った問題児共。

「それじゃ、まずはこのトラップを誰が仕掛けた。正直に答えろ」

「……」……「……」

反応なし。それじゃ

「今日の宿題b「鳴滝姉妹と長瀬です!!」」

「「あかつち!!」」

「ごめん。さすがに宿題倍は困るから」

「よ……し。鳴滝姉妹と長瀬は今日提出の宿題の答えを全部書いてもらうぞ。それと明石は今日やる最初の問題な」

「ええ!!…なんで私まで!!」

「さすがに全部は困るでござるな」

「そうだよ。先生は私達を虐めたいわけ」

「生徒虐待は犯罪なんだよ」

「うるさい！！コレに懲りてもうトラップなんて仕掛けるな」

「私は！！」

「明石は友を売った罰だ。どんな時だって仲間を売ったやつは俺は許さん」

「そうんなあ~~~~」

「その代り。一発目のカード引きをお前にやるから」

「ホント！！ひっひっひ。今日は誰を当ててやるう」

明石。お前顔が魔女みたいだぞ。

ついでに言う俺の授業では名前と絵を描いたカードを使っている。このカードで誰がどの問題やるか決めるためのカードだ。そして見事正解したやつには特別にカードを引かせ次の問題の回答者を決めさせる。このクラスは少し遊びが合った方が覚えが良く思っ
てやってみたが大成功した。もちろん他のクラスでもやっている。

そんなことを言っている間に鳴滝姉妹と長瀬が簡単な問題を取り合っていた。めんどくさいが、十二問ある問題の横に鳴滝姉妹と長瀬の名前を適当に四回書いて行った。書きたんに泣くものと喜ぶものがいたがどうでもいいか。

S i d e : はせがわちさめ 長谷川千雨

「今日の宿題b「鳴滝姉妹と長瀬です」」

明石が罫を仕掛けた犯人をばらして教室がギャーギャー騒ぎ出した。うざい

それよりこの学園はどうみてもおかしいだろう？！あんなデカイ樹があるのに誰も不思議に思っていないし学園長の頭の長さも普通じゃないだろう？！それとこのクラス！！おかしいだろう！！ありえないだろう！！さっきの双子はどう見ても小学生だし。あいつ（茶

々丸) どうみてもロボットだろう!! あたしだけか!! あたしだけが
おかしいのか?! 違うだろう!!

「・・・がわ・・・えがわ・・・」

もういやだ。

「長谷川!!」

「は、はい!?!」

「この問題。解いてみる」

「え、え~~~~と・・・」

「・・・考え事もいいが、授業はちゃんと聞け」

「はい・・・」

「それでは、今日の授業は此処まで。高畑先生が出張で今日はい
ないからこのままHRを始めるといつても何も連絡事項はないから
解散だ。それと、長谷川は俺と付いてくるように」

「は??」

なんだとう!?

「解散」

そしてあたしは白銀先生に連れられて生活指導室へ入った。

「先生。どうしてあたしがここに連れて来られたのですか?」

「さっきの俺の授業もそうだったが、最近お前がボーとしている
とことを他の先生からも聞いてな。何か悩みがあるのなら俺が聞く
ぞ」

悩みか、先生になら話してもいいか

「先生は、この学園の事どう思います」

「この学園か・・・」

先生もどうせ皆と同じで「普通」とか言っただろうな。

「おかしいだろうな」

「・・・え」

おかしい。確かにそうだったよね。聞き間違いじゃ

「先生。もう一度言って」

「おかしいって言ったんだが、どこか不満か??」

「ううん。全然。でも、どうしてそう思うんですか??」

「そうだな・・・まず世界樹だ。あんなに大きいのに誰一人として不思議におもわない。むしろ在って当たり前だと思っている。それがおかしい理由のひとつかな」

「他にどんなこと」「長谷川」・・・はい」

「今お前がどんな気持ちなのか今のでわかった。もし、お前が望むのであればその理由を教えてやろう」

「だったら「ただし」」

「コレをすればもう後戻りできんぞ。それでも聞きたいなら答えよう」

知れば後戻りできないってどうゆう事!?でも、それでこの気持ち治まるのなら

「教えてください」

「・・・いいのか?もう戻れなくなるぞ」

「はい。あたしは知りたい。どうしてあたしだけなのかそれを知りたい」

「・・・わかった。長谷川、お前魔法を信じるか??」

「え??」

魔法。そんな空想世界みたいなのあるのか??あるわけねえだろう。

「信じてないみたいだな。まあ、無理も無いか。それじゃ、証拠を見せてやるよ。プラクテビギ・ナル火よ灯れ（アールデスカット）」

「なっ!?!」

先生の指輪から火が灯された!!

「せ、先生」

「これが魔法だ。言っても初歩の初歩だがな。どうかな、魔法は信じてくれたかな??」

「目の前でやっていて信じないバカはいないだろう」

「それもそうだ。そうじゃ、明日から訓練開始だ」

「訓練??」

「言っただろう。もう後戻りは出来ないって、自分の身は自分で守れるように俺が鍛えてやるよ」

「え、い、いや」「下手したら死ぬぞ」よろしくお願いします」

「心配するな。俺がちゃんとお前を守ってやるよ。そうでなければこんな事は言わん」

「先生って強いのか??」

「ほう、それがお前の普段の喋り方か。そうだな、魔法世界ではそれなりに有名かな??」

「いや、そこ疑問にされても」

「大丈夫。ちゃんと教えてやるよ」

「は、はぁ・・・」

本当に大丈夫なのか。心配になってきた。

「それと、太陰と斎も魔法関係者だ。それとあのジジイと高畑先生もだ」

「なにiiiiiiiiiiii!!」

鍛練Ⅱ女の会話

『鍛練Ⅱ女の会話』

伊東斎だ。全く剣斗の行動には困ったものだ。行き成り生徒である長谷川千雨を連れてきて「魔法を教えたから鍛えるぞ」と言われてもな、ワタシは剣だけが取り柄だし魔法も剣斗と一緒に習った程度でそれほど使えるわけでも無いし

「はあ~~~~~」

色々考えていると長谷川が素振りを終えてワタシを見た。

「はあ、はあ、はあ・・・伊東せんせい・・・素振り千回終わったぞ・・・」

ちなみに、ワタシは長谷川に剣術を教えている。さっきも考えていた通りワタシより剣斗の方が魔法を教えるのが上手いので、ワタシが剣術、剣斗が魔法を教えている。

「それじゃ、次はワタシの斬撃を受け流せ」

「はあ、はあ、はあ、少しは・・・少しは休憩させる!!」

「ん・・・仕方が無いな。少し休憩とするか」

ワタシがそう言い放つと長谷川はそのまま座り込んでしまった。

「まだ、訓練の最初なのだが、もうばてたのか??」

「し、素人に・・・素振り千回させるな・・・よ」

「なに言っている。ワタシなんかお前の十倍はやらされていたぞ」

「あんたと一緒にしないでくれ。まさか、伊東一刀斎が女だったとは・・・」

「仕方があるまい。伊東家に男の子が生まれなかったのだから」

「だからと言って女を男として育てるか、普通」

「武家とはそういうもんか。さすがにワタシが成長して女とばれたあとは男の養子もらったがな」

「先生が捨てた女のはどうなったもんか」

「ワタシは楽しかったがな。男と一緒に刀を振るう事は」

「現在は違うー！」

「まあ、そう怒るな。せつかくの綺麗な顔が台無しだぞ」

「ど、どどど／＼／」

長谷川がだんだん顔を赤くしていく。

「どうした??ワタシが素直に答えてやっているのに」

「ど、どどどどうしてそんなことを??／＼／」

「なんだ、自分の顔にそんなに自信だ無いか。心配するなお前の顔は綺麗だ。こんな筋肉と刀傷のついたワタシよりだんぜんにな」

「そ、そんなことはない。先生の身体も綺麗だよ……」

「そうか……剣斗もなそう言ってくれる」

「先生にとって白銀先生はどんな存在なんだ」

「剣斗は、ワタシがこの世で唯一背中を預けられる者だ。連理の枝みたいなもんだな」

「地に願わくは連理の枝の如しってわけか」

「そうゆうことだ。昨日の授業、役に立っただろう。作者までわかっていれば」

「……忘れたよ。だが、あたしもそんな人見つかるのかな??」

「それはお前しだいだな。もしかしたら、すぐそばにいるかもしれない」

「!??／／／」

「おや??もしかして」

「ち、ちち違うー!!絶対に白銀先生ではないぞ」

「ワタシがいつ剣斗だと名乗った」

「なっ!??／／／／」

「この事は女の約束だな」

「ぜ、絶対に白銀先生には言っなよー!!」

「ワタシとて武士だ。武士は約束を守るもんさ」

長谷川は頭を抱えながらうずくまってしまったが、これはきっと良い方へ向っている兆候なのであろう。

ワタシが長谷川を見ていると後ろから剣斗がお茶持つてやってきた。これで女だけの話は終わりだな。

そのあとワタシ達は剣斗の入れたお茶を飲みながら魔法の話をした。この輪にこのかが入ればもっと楽しくなるなどとワタシが思ったのはここだけの秘密だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4714w/>

魔法先生ネギま！？ 剣聖の騎士

2011年10月10日03時05分発行